

緊急性の高いヒヤリハットはシートに書いてはいけない

—すぐに緊急カンファレンスでリスク共有—

■異食で窒息した利用者

K君は生活介護（通所）を利用しています。まだ、利用開始から日が浅いので、職員もK君のことで良く分からないことがたくさんあります。ある日、K君がデイルームの隅でクッションのジッパーを開けて、ウレタンのスポンジを出しています。職員が近づくとこれを口に入れたので、職員はすぐに「K君、これは食べるものではないのよ」と言って、吐き出させました。職員は翌日、K君の異食をヒヤリハットをシートに書いて施設長に提出しましたが、同じ日にスポンジを異食して、窒息し救急車で病院に搬送されました。幸い命に別状はありませんでしたが、施設長は事故の前にヒヤリハットがあったことを家族には話しませんでした。

ヒヤリハットはシートに書いて出せば良いか

■ヒヤリハット活動が形骸化していませんか？

新たな危険をヒヤリハットで見つけておきながら、迅速な対応を怠ったために大きな事故につながってしまったのです。K君がクッションのスポンジを口に入れたのであれば、すぐに緊急カンファレンスを行いこの利用者に異食癖があることを他の職員に知らせるべきだったのです。

介護職員がそれまで発生しなかったような利用者の危険を発見した時、昔はどのように対応していたのでしょうか？ヒヤリハット活動と言って漫然とシートに報告を書いて提出するようになったのは、2000年くらいからです。それまでは、緊急カンファレンスを開き利用者の新しいリスクに応じた対応を職員間で共有して注意を喚起したでしょう。

利用者のリスクは一様ではありません。日によって異なりますし環境によっても異なります。「ヒヤリハットシートを提出すれば良い」と考えているから、緊急な対応が必要なリスクの報告もしなくなってしまったのではないのでしょうか？このように考えると、「ヒヤリハットの体験をシートに書いて上長に提出する」という日報のような取り扱い、ヒヤリハットの目的と外れた扱い方なのかもしれません。まず、迅速な対応ができないですし、施設長のバインダーに綴じられてしまったら、同じ職場で起きているヒヤリハット情報の共有さえできなくなるのです。

■ヒヤリハットノートで情報共有

ある施設の主任Hさんは、忙しい職員がヒヤリハットシートをたくさん書いているのに、事故が減らないことに苛立っていました。あるセミナーで「ヒヤリハット事例の分析と対策検討をしなければ、シートを書いても事故は減らせない」と聞き、Hさんは原因分析の前に、ヒヤリハット情報を職員で共有することを考えました。職員が絶えずヒヤリハット情報を共有すれば、自然に利用者をもっと良く見てたくさん関わるようになり、原因にも気付くのではないかと考えたのです。

Hさんはヘルパーステーションにヒヤリハットノートという見出しのバインダーを備え付け、職員が書いたヒヤリハットシートを綴り、施設長に提出することを止めました。また、主任のHさんがヒヤリハットノートを良く読み、緊急性の高いヒヤリハット事例には赤の付箋を付けるようにして、しっかり読むように職員に徹底しました。すると、職員全員がヒヤリハットが起きた利用者を注意して見るようになり、「〇〇さんは、早朝に転倒するのだから、朝のバイタルに異常があるかもしれない」という会話も出てきました。ヒヤリハット情報を共有するだけでも、職員の意識が利用者のリスクに向かい様々な気付きが出てくるようです。

発行責任者

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社
マーケット開発部 市場開発室
担当 堀江 TEL 03-5789-6456

担当課支社・代理店

株式会社福祉施設共済会
東京都渋谷区渋谷1-5-6 SEMPOSビル
電話03-5466-0881 FAX03-5466-0882